

平成29年8月30日(水)

老球の細道352号

保護者が望む指導者とは

日本のあらゆるスポーツの中で、選手強化、普及、指導者の育成などで最先端を突き進んでいるのがサッカー界であろう。今は昔、日本においてはバスケットボールのほうがサッカーよりもメジャー気味だったのが、今ではダメジャー。Jリーグのプロ化によって大きく水をあけられて久しい。素直に悔しい。

以前、JFA(日本サッカー協会)の保護者向けのハンドブック『目指せベストサポーター』というものを見つけ読んでみた。さすがに視点が違う。ジュニア世代を長い視点で育成しようという哲学が徹底されている。目先の勝ち負けにこだわるな、長期にわたって育てて行こうということである。ダイヤモンドの原石を長期にわたって磨いていくには、なんと言っても保護者のかかわり方が大きく影響する。保護者が賢いサポーターにならない限りはJFAの目指す壮大な目標(サッカー人口を1000万人にする。ワールドカップを日本で開催し優勝する)は夢物語になってしまうということだろう。

ところで、この冊子は保護者向けに書かれたものであるが、その中に保護者がどのような指導者を望んでいるかというコラムが載せられていた。賢くて、長身でイケメンであるなどと言う条件はなかったので一安心した。退職後も、もしチャンスがあったら再度コーチとしてデビューする気持ちがある私にとっては参考になる内容盛りだくさん。サッカーもバスケットボールもスポーツのコーチであればすべてに通用する条件である。私は条件をクリアできているかどうか考察してみた。

1・子どもが好き：子どもが一生懸命になって練習に励む姿を見るのが何よりの楽しみである。彼女と花火を見たり、海辺で遠い星なんかを見るよりも子ども達の喜ぶ顔が好き。

2・情熱がある：一応「四つの意」(熱意、誠意、創意、室意)が私の売り。しかし加齢とともに近づいた人たちを火傷させるような情熱は失ったかもしれない。歌手冠次郎のあの歌『炎の男』の歌詞「燃えろ♪燃えろ♪燃えろ♪」を思い出そう。

3・明るくさわやかである(言葉づかい、服装、礼儀正しい、あいさつ)：東京での生活経験がないから言葉使い、服装は鬼娘からダサイとさげすまれている。礼儀正しきはだめだろう、何事も自己中だから。クリアできるのは挨拶くらいか。

4・忍耐力がある(指導には時間がかかる)：だめだ。すぐ頭に血が昇る。今まで色々な人たちと何度衝突したことか。ホンモノは大器晩成であることを肝に命ず。

5・子どものレベルに自分をコントロールできる：これは合格。なぜならいまだに子どもだから、コントロールしなくてもそのままOK。

6・モラルがある：聖人君子にはなれないが、自分の嫌がることは他人にしない。自分がして欲しいことは他人にしてあげる黄金律くらいしかできない。

7・デモンストレーション(実際やってみせること)ができる：これはまだOK。加齢をいいわけにはしたくないが華麗にはできない。その辺は適当に言い訳して紅茶をにごす。

8・オープンマインドである：私が出会った一流と言われるコーチで心を閉じて他人の意見を聞き入れない人など一人もいなかった。ゆえに私もそうありたいと思っている。

ダイヤの原石達の成長は指導者との出会いによって決まると言っても過言ではない。選手はコーチの鏡だから責任重大である。コーチと出会えて良かったと言われてみたい。